

石川モンゴル親善協会だより

～ Байгаль Эх Байгал Эгэ 母なる自然 ～

第6（特集）号

石川モンゴル親善協会事務局
事務局長：藤木 正範
〒920-0862 金沢市芳斉2-11-18
TEL : 090-9449-4323
E-mail : fujiki4323@gmail.com

【モンゴル国スタディツアー2013】活動報告



92番学校への日本語図書贈呈式の様子（左：沢田会長、右：Oktyaburi 校長）

●日程

2013年8月30日（金）～9月6日（金）

●訪問先（主な活動）

- ①92番学校（日本語図書の寄贈・交流会）
- ②ウランバートル市内見学（史跡・博物館見学等）
- ③ホスタイ国立公園
- ④ハラホリン（ハラホリン博物館、エルデネゾー等）
- ⑤アルバイヘルとオング川（サジー農園見学）
- ⑥ゴビ砂漠視察

●目的

モンゴル国を実際に訪れ、博物館をはじめとした観光地や史跡の見学、現地生活の体験、現地の人々との交流等を通じて、今後の両国のさらなる相互理解と発展の礎とすること。

●参加者

石川モンゴル親善協会員7名



写真：ウランバートル・スフバートル広場にて
（左より）杉原、藤木、宮田、沢田、清水、渡辺夫妻

沢田 勲

ウランバートル・バヤンズレフ区92番学校を訪ねて



2013年8月30日～9月6日に、石川モンゴル親善協会の会員7人がモンゴル国を訪問した。今回のモンゴル国訪問目的は、首都ウランバートル市バヤンズレフ区に在る92番学校を訪ねて、モンゴルの子供たちに日本文化の一端を紹介することにあつた。92番学校が選ばれたのは、この学校の校長がドルスレン・オクチャブリ氏（モンゴル語教室で講師を勤めるドーヤさんの父君）で、日本との交流を強く望んでいたからである。

現在のモンゴル国は、少子化に悩む日本と違って、全人口のうち16歳以下の子供たちの占める割合がきわめて高い。それゆえ、モンゴル国では1994年以降何度か教育の大改革がおこなわれてきたが、まだ十分とはいえない。とりわけ、近年の首都ウランバートルへの人口集中が、教育改革を困難にしているようである。

今日のモンゴル国の教育制度は、11年制に拠る小中高一貫教育（小学5年・中学4年・高校2年）が一般的であるが、92番学校もその体制のもとで教育されている。92番学校は、56組1600人を超す生徒が在籍し、120名の教職員が教育を提供している。

ウランバートル市内でも有数の学校であると聞いている。とりわけこの学校の特徴は、40人を超える子供たちが日本語を学習している。今回の私たちの訪問は、こうした日本語を学習する子供たちと肌に接し、先生方とも交流してモンゴルの教育現状を知ることにあつた。交流会では、日本民話を紹介し、剣玉をはじめとした日本の遊びを子供たちと過ごし、時を忘れて予定の時間を大幅に越す楽しいひと時であった。

同時に、今回は、金沢市立玉川図書館の協力を得て270冊におよぶ書籍（日本民話・歴史・詩文等）を寄贈した。今後も、図書館の協力を得て毎年送り続けたいと思っている。オクチャブリ校長によると、「日本国・石川モンゴル親善協会文庫」というコーナーを設けて、寄贈された書籍を広く生徒たちが利用できるよう配慮するようである。

今回の訪問は、石川県とモンゴルとのささやかな交流の一步にしか過ぎない。だが、「雨垂れは石をも穿（うが）つ」のたとえのように、かかる小さな交流の積み重ねこそが、石川県とモンゴル国の友好への架け橋になるものとわれは確信し、今後も続けたいと思っている。



（教員との懇親会）



昔話『かさじぞう』の朗読

杉原美那子が日本語を勉強している生徒たちに、日本の昔話を朗読した。日本語のみで語りかけられる話を、スライドの挿絵を見ながら必死に聞き入る生徒たち。「良いことをするときと良いことがある」というメッセージがきっと伝わったことと思う。朗読後『かさじぞう』を読んだことがあるという男子生徒が立ち上がり、しっかりとした口調で感想を述べたのが印象的であった。

活動報告① 清水 幸夫

初めてのモンゴル国訪問

予てから一度は訪ねてみたいと思っていたモンゴル国。我々日本人にはモンゴル即ちチンギスハーン（井上靖の『蒼き狼』）そして元寇、義経伝説、あるいは蒙古斑等なにかと親近感を覚える国ではある。

我々の訪問機会となった第一の目的は学校で日本語を勉強している子供たちに日本語の本を贈ることにあった。子供たちがこれらの本から日本に何らかの興味を持ち、将来日本留学あるいは文化交流やビジネスパートナー等日本との係わりに発展するようになってくれれば幸だと思う。しかし、他の発展途上国も同じ状況かもしれないが、人気のある外国語は英語であり、ロシア語、中国語などがそれに次いでいるようである。側聞ではあるが、同国へのビジネスあるいは文化面において、日本は他の諸外国に比して大きく出遅れているようである。隣国としてロシア、中国の進出は顕著であり、韓国もまた同じであるようだ。また、ドイツやフランスの企業も進出してきているようである。



ボグドハーン宮殿博物館（ウランバートル）

訪問後チェェグさんはじめ金沢大学に留学経験のあるボルさん、ナツガさんたちにウランバートル市内のカンダン寺や国立博物館等を案内していただいた。モンゴル民族の歴史はチンギスハーンが始めではなく、他民族同様先史時代からの痕跡も最近発掘されてきているようである。周辺民族との軋轢のなかで民族の分散、集合が繰り返されてきたことが博物館の展示からも垣間見える。

ウランバートル後ハラホリン（カラコルム）⇒アルバ



エルデネゾー

イ・ヘル⇒ウランバートルと2泊3日のドライブ旅となった。ハラホリンに行く前に私の希望でもあったホスタイ国立公園（ウランバートル中心部から南西95km）に寄ってもらいモウコノウマ（モンゴル語でタビ）を見ることができた。この馬は蒙古の固有種であるが、19世紀までに食用などで現地では絶滅したが、幸い欧米の動物園で飼育されていて種としての絶滅をまぬがれ、1980年オランダの動物園から数頭の馬が逆輸入され現在は公園内に野生のまま保護されている。

ハラホリンはかつてモンゴル帝国の首都が置かれていたところで、周辺はユネスコの世界遺産（オルホン渓谷の文化的景観）となっている地域である。我々は町に隣接するエルデネ・ゾー（108個のストゥーパと400m×400mの正方形の壁に囲まれている仏教寺院群）、ハラホリン博物館を午前に見学し、昼食後アルバイ・ヘルに向かった。

ここでモンゴルの道路事情について書いて置きたい。ウランバートルの交通渋滞は日本のそれとは格段に悪い。交通マナーも最悪である。日本人が例え国際免許を持っていたとしても運転はやめておいた方が賢明である。郊外の幹線道路（我々が走った道路に限って言えば）も旧社会主義時代に建設されたものであろうが、片側1車線の舗装道路であるが数十メートルごとに大きな穴があり、それを避けるため対向車線を走り、時には路肩を走行するという状態である

ハラホリンからアルバイ・ヘルまでは幹線道路はあるが、ドライバーの勧めで草原の近道に行くことにした。近道のおかげで（？）明るいうちにアルバイ・ヘルのホテルに着いた。このホテルはきれいなホテルだった。

（宿泊費60,000Tg、約3,600円）。翌日早朝ホテル周辺で写真を撮りながら散歩。朝食後50kmほど草原を走りチャチャルガン栽培（日本名サジー、グミの一種）の農園へ見学にいった。前夜農園の管理者の女性と夕食を共にしながらお話を聞いたのだが、今年はヒョウ害で収穫は期待できず、夫はウランバートルへ出稼ぎに行っているとのことだった。また、例年収穫予定量（約1トン）の2割は鳥害によって減収になってしまうらしい。

昼過ぎに農園に別れを告げ、杉原、清水の二名はガイドとともにウランバートルへ路車を走らせフラワーホテル（ウランバートル）に着いたのは20:00頃だったと思う。フラワーホテルの大浴場（？）に入り、雑事をこなし、寝たのは1時過ぎとなった。

今回の訪問では、モンゴル訪問経験が豊富な藤木事務局長、そして金沢で留学生達の生活をサポートしてきた会員各位の努力が大きな力になったものと思い感謝いたします。

活動報告② 藤木 正範

「オンギ川市民運動」のサジー畑

4日朝 アルバンヘールのパレスホテルまでオユンさんにきていただいた。オユンさんは1日にウランバートルでムンクバイヤーさんに紹介してもらった女性である。この町まで馬できておられるというので、彼女を私たちの車に乗せて清水、杉原、宮田、藤木、通訳のツェツェグと運転手の5人はオンギ川沿岸に散在のサジー畑に向かった。アルバンヘールの町は朝日を浴びて整備しつつある道路や建設途上のビルの工事が砂煙が立ってキラキラ光っている。4年前に来た時に比べ町は一回り大きく美しく見えた。4年前にこの町で中学教師をやっていたムンフナサンさんを亡くすまでは、僕はこの町で一生過ごすかも知れぬと思っていた。



オンギ川



サジー（チャチャルガン）の実

オンギ川の増水で20kmばかり後戻りして橋を渡らなければならないと言う。幅20m水深40cm位で通常ならランドクルーザーなら車を川に入れて渡ってしまうのである。親指大の小さい砂利がある草地を走る。ところどころヤクや羊を放牧している。サジー畑は川沿いに作られ4～5年で8hから16hに広げられた。一つの畑は1hある。サジーは黄色い実を付けていたが収穫の後であり、実の数は数えられるくらい少ない。今年は収穫が悪く収入があてにできなかったのでご主人は外に出稼ぎに行かざるをえない状態だという。

小さなジャガイモの畑があり川の向こうに見える、馬で渡るのだという。畑の水撒きなどの手伝いに日本から大学生たちが訪れている。次回僕たちが来る時は何か手伝うことができればよいと思う。

「オンギ川市民運動」とは金鉱山によって川が涸れ湖が消え遊牧が不可能になったため牧童たちがたちあがり採掘の中止をもとめた運動。2009年11月環境法が国会で可決し、上流のオヤング鉱山などの中止が決定。現在あまりに法律が厳しすぎるというゆりもどしの動きがあり、ムンクバイヤーさんらは馬によるデモで国会を包囲するなど再び運動が活発化している。サジー畑はこの運動の水辺再生活動のひとつ。

活動報告③ 宮田 千鶴子

「バイアルマ」



広い草原と地平線と、その中に暮らす遊牧の人と生き物。今まであこがれていた世界の“本物”がどこまでも続いていた。少しでも見逃したくなくて、その風景を見ていた。同じように見える景色も天候や時間、空気によっていろいろなものに変化して飽きることはなかった。

旅の後半になり、若いモンゴル人女性バイアルマが、砂漠から山岳地帯まで案内してくれた。2日間でウランバートルへ帰り着く予定だったが、夕方になると「今夜は帰れない。どこかで泊まろう」ということになり、ホテルをキャンセルして通りがかったゲルキャンプに宿泊して、結局5日以上道のない草原をひたすら走った。

美しい風景はもちろん心に残ったけれど、一番強く印象に残ったのは彼女の心だった。山の上にあるオボーを通りすぎるときには車の窓をあけてモンゴルのチーズ、アーロールを撒き、車の中では国の歌を歌ってくれた。砂漠では自在に馬に乗る彼女の故郷にもおとずれて立ち去る朝、町のはずれで車を停めて、プラスチックのコップにミルクをついで青い空に向かって撒いて、大地に口づけをした。「どういう意味だったの?」と聞くと、「娘が帰って来ました。また来ます。ありがとう」という意味だと教えてくれた。

ウランバートルでは、スフバートル広場の近くの国立劇場でモンゴルを紹介する歌や踊りを一緒に楽しんだ。お人形のようにかわいらしく、又時々激しく踊る踊り子さん達の衣装がどうしてそれぞれ違うのか、その民族の地方の特色など教えてくれた。少女のような女性が曲芸を

見せてクライマックスになったときに、彼女は思わず中腰のようになり思い切り拍手した。彼女がこの国を深く愛していることと民族の誇りが伝わってきた。

モンゴルは、都心には近代的なビルが建ち、一方では草原で遊牧や狩りをして暮らす人々。ウランバートルに暮らす彼女は「モンゴルが先進国になったら・・・」と話していた。先進国といわれている日本で生まれて育ち、近代の恩恵を受けた私が「そんなことに価値はないよ。モンゴルはずっとこのままのほうがいい」と言う権利なんてない。全て自由に選択する権利は、そこで暮らす彼女たちにあるのだ。だけど、どんなに世界やモンゴルが変わっていたとしても、この旅で出会った人々や自然や、彼女が・・・どうかいつも、いつまでも幸せでいて欲しいと思いました。



活動報告④ 渡辺 勝美・由美子

「再会」

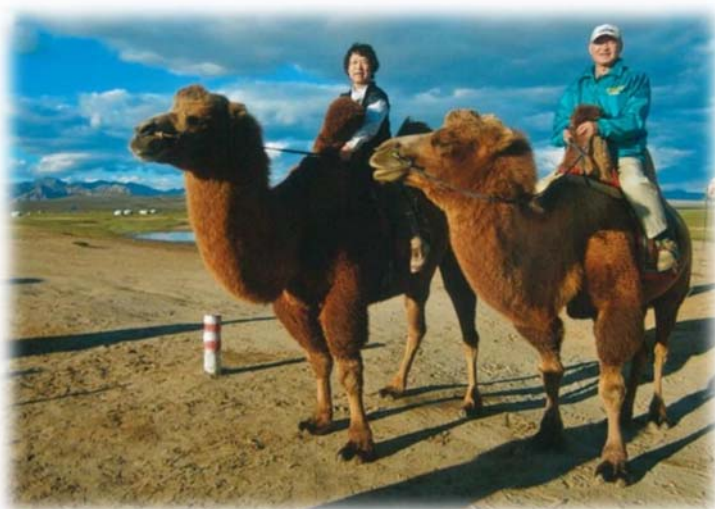
私たちのモンゴル国及びモンゴル人との交流は平成3年に遡りますが、この度ようやく、そのモンゴル国を訪問することになりました。

小松空港を8月30日正午に出発、途中インチョン空港で約6時間の乗り継ぎ後、モンゴル・チンギスハーン空港には当日午後10時30分予定通り到着しました。そこで見たのはあの懐かしい2人の顔、ボルさんとナツガさんでした。ボルさん家族は私達夫婦が本格的にモンゴル人と知り合い、ご主人、奥さん、2人の息子さん達と本当に沢山の楽しい思い出を残してくれました。金沢の会社の支店長をしているご主人とは今でも時々

金沢へ来た時に会いますが、ボルさんとは本当に久しぶりでした。又、ナツガさんとの思い出も本当に沢山ありました。3人の小さな子供達の事などが特に思い出深いです。

今回の訪問の最大の目的はウランバートル第92学校の入学式（9月1日）に出席し、そこで石川モンゴル親善協会から子供達へ日本の書籍を贈呈する事でした。今回の書籍の寄付は金沢玉川図書館の好意によるものでした。日本の堅苦しい入学式を経験している者にとって、なんと自由な雰囲気で行進式が進行し本当に楽しんでいるのが印象に残りました。その後、日本語教室にて日本語を学んでいる小学生達との交流も楽しく、いつかこの子供達が金沢へ留学できると素晴らしいことだと思わずにはいられませんでした。

ることの無い風景。緑の低い丘、羊の群れ、牛の群れそして馬の群れ、時折我々の進んでいる道路を悠々と横切る家畜の群れ、点在するゲル等、まさに「モンゴルの風景」でした。



（左から）ボルさん、渡辺由美子、ナツガ夫妻

元金沢在住の留学生達との久しぶりの交流も楽しいものでした。飛び入りしたのはハスバートル君で、私達が平成3年に初めてモンゴル人のホームステイを経験した人です。当時彼は20歳代後半の若きホーミー歌手でしたが、今は素晴らしい実業家になっていました。

ナツガさん夫婦の子供達とも久しぶりに会えて自分たちの孫に会えたような嬉しさでした。日本に滞在していた頃はそれぞれ幼稚園児、小学生、中学生で日本語の習得の速さは目を見張るものがありました。帰国して2年も経つと多くの日本語を忘れてしまったとのことでした。

ハラホリンへの旅は日本の国内旅行と全く違い、1本のひたすら真っ直ぐの道。そして行けども行けども変わ

ハラホリンはかつてモンゴル帝国の首都で今でも多くの歴史的な遺跡が点在する。その中でもエルデネソー（寺院）は世界遺産です。付近には日本のJICAの協力による歴史博物館がありました。

8日間のモンゴル訪問もいよいよ終わりになり9月5日、皆で市内のデパートで10月に開催される国際交流祭りに出店する商品を仕入れ、全行程を終わりました。帰りも出発は午後12時頃でしたが、ボルさんは最後まで見送ってくれ、私の妻もお互い抱き合い別れを惜しんでいました。いつの日か又訪問したい気持ちで一杯でした。





帰国後 わが家を訪れたボルさんが かざってあったラクダのぬいぐるみを見て「これはお父さんになるラクダですね」と言った とっさにその意味がわからなかった それがお父さんのポーズであり 大方のお父さんが お父さんにはならないことをはじめて知った あごを上げ 後足を不自然に折り曲げているラクダ「モンゴル人でも これは遊牧民でないといけないでしょう」と 彼女は少し誇らしげに言った 天折した女性革命家の名前を持つボルさんは 教育マナーシメントの勉強のため 家族四人で金沢に住んでいる留學生 明かるくシマンハンである

行けども行けども続く草原と乾いた道 午後九時も過ぎて 砂漠の長い一日もようやく暮れようとしていた はるかな地平線に沈む太陽 それは黒いほど赤く燃えたつ太陽であった 沈むというには あまりにダイナミックな落日であった そこへ突然 二頭のラクダがあらわれた どこから来たのだろうか 目を疑うほど 出来すぎた構図 巨大な落日を背景に 仲良く並んで ゆっくりと歩いて行く二頭のラクダのシルエット あまりに幻想的な場面に出くわし なのに向かって叫ばずにはいられないような衝動に駆られた

もてなしの料理はホゴロック 羊の石焼き蒸し焼きである 黒っぽい 丸い石がお皿にのせて出される 脂のついたまだ熱い石を 掌につつま込む 疲れが取れ 血流が良くなるという 羊の体温が伝わってくるようだ 骨つき肉は白い骨が見えるまで食べるといのがモンゴルの流儀 生命をもらった羊に対する感謝のこもったお返しだ

星空は 天にはなく 目の前にあった 澄み切った冷気 静まり返った夜気の中で またたきもせず まっすぐに 見凝めてくる無数の星たちの視線 いっせいにわあっと注がれ 全身をつき刺す 星のつまった巨大な籠の中にとらわれたちっほけなムシ 圧倒され 硬直してしまう 無意識に潜在していた畏怖心に ひとりで立ちすくみながら 必死に耐えていた 凍りつくような孤独無数の流れ星 人には それぞれひとつずつ 決まった星があるという わたしの星はどこでわたしを 見凝めているのだろうか

スイッチをひねった時 ゲルに灯ったひとつの電球 それは 象徴的な光を放っていた わたしたちが日本から持参したパネルに集められた光のエネルギーに砂漠に照りつける無尽蔵の熱エネルギーが パネルを通して ひとつのあかりに姿を変えた ウランバートルには すでに多くの外国資本が入り込み わたしたちは 朝 ホテルで エキのニュースを見て出てきた 大きなパラポラアンテナを設置したゲルも 途中で見かけた 地平線の向こうから 確実に近づいて来ているものがあるのだ 遅かれ早かれ それは避けることができないものであるにちがいない テールを着てゴタルを履いた人たちは それをどのように受け入れるのだろうか その時 「モンゴル人のように」という言葉は残り続けるのだろうか モンゴルの人たちの心が豊かなのは もしかするとスーティー茶(乳茶)や馬乳酒など 動物たちのお乳をたっぷり飲んでい

注・これは二〇〇四年に作成した詩の抜粋です



モンゴル人のよこし 杉原美那子

—「ゴビ」砂漠の旅より

天・土・水が集まる場所 守護神が宿る石の堆積 オボーは 柳の枝に無数の青い布切れをまきつけ 風になびかせながら立っていた 神聖な青色に託す人々の心 わたしたちも 慣習にならって 神妙な顔をして その周りをまわった 一周ごとに一つ石を積み 三周して 旅の安全を祈った 砂漠の方から吹いてくる風が かぐわしいミントの匂いをはこんでくる 体のすみずみまで吹き抜け さわやかな元気を生み出してくれる風だ すっと憧れ 思い続けてきた砂漠！それが叶う時がやっと来た 日本人四名 モンゴル人六名が 二台のランドクルーザーに分乗し 一五〇〇キロの砂漠の旅に出発する

丈の短い草が果てしなく広がる 羊が食べ ラクダが食べ 馬が食べ 人も食べる草 雨が降れば 一面がすぐにまっさらに変るといふ どこまで行っても地平線が続く 乾ききった明るい茶褐色の道 砂礫の道は 轍で深くえぐられ モンゴル人の骨格のように頑強に固まっている 飛び跳ねるような難路が続き 時々悲鳴をあげる 必至でしがみついていた掌には マメができた すでに十八万キロを走り終えているランドクルーザーは 頓着なく 時には八十キロにスピードを上げて進んでいる まさしくモンゴリアンブルの空のどかに浮かぶ白雲 とどこどこに散在するゲル 羊 馬 ラクダが 家族のように一体化してその周りを囲む 人と生きるものが そこに日々暮らし 生活しているというにおいも感じさせない遠景 時間さえ止まってしまうような風景を 旅人であるわたしたちは それぞれの思いで眺めていた 迷った時 遊牧民に道を尋ねると 彼らは決まって答えるという 「遠くはないよ もうすぐだ」と方角を示す腕の高さで その遠近がわかるそうだ 遠くはないよ もうすぐだ わたしはその言葉を大事に胸の奥にしまっておこうと思った

祈る母子 おっぱい山 時には岩山の側を通り 時には山を見ながら わたしたちの長い旅は続いた 休憩地点で車を降りる 男性は それぞれの方向を向いて放尿する 唯一日本人女性のわたしは 最初慣れないことにとまどったがここではいつか動物に変っていった 草丈の短かい草原 隠れようにも場所がない なるべく遠く離れ 覚悟を決めてオシッコをする 乾燥した空気の中 しゃがむと ゴビン・ハタン(ゴビの妻)の匂いがいっそう強く薫る 草原に咲く花は すべて小さくつましやかな色をしている わたしも羊になって ゴビの大地にオシッコをさせてもらう

ある村に立ち寄った時 動物の水のみ場があった わたしたちが水を汲み上げ桶に流していると むこうの方にいたラクダの群が ゆっくりと近づいて来た近くで見るとラクダは 思いがけないほど大きかった あらそって水を飲むわけでもなく おとなしくひかえて順番を待つ 砂を防ぐため 二重に並ぶまつげ おだやかで大きな目 そのやさしい目が忘れられないと 友は旅の間中 何度くり返した 大きな群の中でも オスはほんの数頭を残して去勢されてしまふという おとなしく見えるラクダも その季節を迎えると 人も近づけないほど 烈しく狂暴になり 捌け口を求めるように 群のまわりをぐるぐる走りまわり続けるという